

血統登録から。増井光子（麻布大）、動物園の将来と課題：ズーストック計画から。鈴木宏（山梨医科大学前学長）、チンパンジーと医学研究。林良博（東大）、日本における人と動物の関わり：諸外国との比較。

ポスターセッションのあと、一般向けの講演会（司会：小嶋祥三）がおこなわれた。石田芳弘・犬山市長の挨拶。西田利貞（京大）、チンパンジーの文化。河合雅雄（兵庫県立人と自然の博物館）、ジェーン・グドールさんの人としごとの紹介。ジェーン・グドール（JGI）、野生チンパンジーの母と子のきずな（通訳：松沢哲郎）。

11月20日には以下のとおり。シンポジウム「研究と自然保護の接点」（座長：山極寿一）。1948年11月5日に幸島での野生ニホンザル研究が始まって今年で50年目を迎えた。霊長類研究さらには類人猿研究の軌跡を振り返り、現状を広く展望し、そして野生保全の試みにおける研究活動と行政の接点を考えた。伊谷純一郎（神戸学院大）、霊長類学・大型類人猿研究ことはじめ。加納隆至（京大）、チンパンジーの分布。菊地邦雄（自然環境研究センター）、野生生物の保護とサステイナブル・ユース：アフリカの話題を中心に。コメント：高崎浩幸（岡山理科大）。

招待講演、ヤン・ファンホーフ「飼育下のチンパンジーのQOL：アーネム・コロニーのチンパンジーたち」（司会：松沢哲郎）。ファンホーフ教授はオランダにある世界有数のチンパンジー飼育施設アーネム・コロニーの創設者である。アーネムは、彼の指導を受けた学生だったフランツ・ドゥバルの「政治をするサル」「仲直り戦術」という著作の舞台ともなった。チンパンジーを野生に近いすがたで飼育することの利点とリスクをお話くださった。

ポスターセッションをはさんで、講演「大型類人猿の多様な研究」（司会：木村賛）と冠した3題の話題提供があった。濱田穰（京大）、チンパンジーの発育パターン特徴の進化的考察。マイク・ハフマン（京大）、チンパンジーの自己治療行動：最近の野外と飼育下の研究。ジェームズ・アンダーソン（スターリング大学）Primates: Sorting out

their selves.

続くCOE形成基礎研究発足記念シンポジウム（座長：大澤秀行とマイク・ハフマン）は公用語を英語としておこなった。竹中修（京大）、Noninvasive sampling for genetic analysis.アレキサンダー・ハーコート（カリフォルニア大学）、Gorilla socio-ecology: male vs. female strategies. 杉山幸丸（京大）、Socio-ecological variation of chimpanzees: Bossou and other research fields.

こうした講演・口頭発表とともに2日間にわたってポスター発表がおこなわれた。それらは以下の4つのセッションにまとめられた。1) 野生調査地から、2) 動物園等の飼育施設から、3) 研究施設から、4) 自然保護等の立場から。それぞれのご発表の詳しい内容は割愛する。以上の成果の一部をまとめたものが今回の「霊長類研究」特集号である。

なお、上記の講演のうちジェーン・グドールさんのものは、以下の著作としてすでに公表されているので参照されたい。

ジェーン・グドール（1999）アフリカにおける野生チンパンジーと自然保護、「科学」、69(4)、306-310.

ジェーン・グドール（1999）野生チンパンジーからのメッセージ、「エコソフィア」、3、42-51.

また、岩波「科学」1999年4月号は、「人間成立以前のすがた：霊長類学のいま」と題し、SAGAシンポジウムを下敷きにした特集号である。

上記の研究発表や交流とともに、第1回サガ・シンポジウムにおいて、下記の方々の同意を得て、次の3項目からなる「大型類人猿の研究・飼育・自然保護にかんする提言」をおこなった。

- 1) 野生の大型類人猿とその生息域を保全する。
- 2) 飼育下の大型類人猿の「生活の質（QOL）」を向上させる。
- 3) 大型類人猿を侵襲的な研究の対象にせず、非侵襲的な方法によって人間理解を深める研究を